

第三項 屋根

一 屋根瓦

正倉は大正二年に解体修理され屋根も葺き替えられているが、創建以来の各時代の瓦が残されていた。ここでは、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鬘斗瓦については時代毎にその状況を見ていくこととし^(注九)、鬼瓦と鳥衾瓦については、その種類毎に見ていく。

(一) 奈良時代

奈良時代の瓦は、平瓦・丸瓦が残っており、平瓦を半裁したものが鬘斗瓦に使われていたほか、隅棟から、もと使われていた奈良時代と思われる鬘斗瓦が見つかった。

イ 平瓦

奈良時代の平瓦は、七三九枚(平瓦全体の三・二六%)残存していた。そのうち、桶巻き作りが五三八枚、一枚作りが二〇一枚であった。いずれも表には布目、裏面には縄叩き目が施されていた。東大寺造営時には、平瓦の製瓦技術は桶巻き作りから一枚作りに移行していると考えられるが、残っていた奈良時代の平瓦のうち、桶巻き作りが約七三%で、そのほかの約二七%が一枚作りという状況であった。平瓦の規格は、長さ三五〇～四〇〇mmであり、長さで五種類に分類され、三六〇～三七〇mmのものが最も多い。瓦の幅は、狭端部は二一〇～二六〇mm内外、広端部は二五〇～二九〇mm内外のものである。現在の正倉から当時の一尺寸法を割り出すことはできなかったが、平城宮などの状況から考えると、天平期の一尺は、二九六mm内外と考えられるので、正倉の瓦割は約一尺と考えられる。

桶巻き作りと思われる瓦には、布の綴目、粘土の合わせ目、顕著な模骨痕等の桶巻き作り特有の痕跡が認められた。一枚作りは、その製造工程の特徴であ

る側に布が回り込んだ痕があるものがあった。また、裏面狭端部のナデ消しはなく、裏面全面に縄叩きがあること、桶巻き作りに比べ谷が浅いこと、厚さが薄いこと等の特徴が見られた。また一枚作りの瓦には「東」「東大」といった文字の刻印のあるものが発見された。

ロ 丸瓦

奈良時代の丸瓦は、一〇一本(丸瓦全体の一・四一%)であった。表面には縄叩き目、裏面に布目があった。胴の長さ、玉縁の長さの違いや、玉縁取り付き方の違い、面の取り方や面取の箇所の違いにより、約九種類に分類される。

玉縁の取り付きが浅く、玉縁が長いものが桶巻き作りの平瓦に対応するものと考えられる。およそ六種類に分類され、胴の長さ三〇五～三二五mmで、長さ三二〇mm前後、玉縁長さは六〇～七〇mm前後のもので、長さ三二〇mm前後、玉縁長さは七〇mm前後のものが最も多く見られる。裏の面取は小さく、玉縁部分の面取は大きい。

玉縁の取り付きが深く、玉縁が短いものが一枚作りの平瓦に対応するものと考えられる。およそ三種類に分類され、胴の長さ三〇〇～三二〇mm、玉縁長さ五〇～六〇mmのもので、胴の長さ三一〇～三二〇mm、玉縁長さ五〇～五五mmのものが最も多く見られた。

その他玉縁の取り付きが中間のものが一種類みられ、胴の長さ約三〇〇mm、玉縁長さ約六〇mmで、玉縁の外側にも面取が見られた。

ハ 鬘斗瓦

鬘斗瓦に使われていた奈良時代の瓦は、平瓦を半裁したものであったが、隅棟などの葺土の中から奈良時代のものと思われる鬘斗瓦が発見された。

見つかった鬘斗瓦は、長さ三一五mm内外、幅二二〇～一四〇mm、厚さ二五mm内外で瓦の表面には布目のついた面と縄目のついた面が見られた。

この鬘斗瓦は、瓦の側から二五mm程度が風蝕しており、側から四五mmぐらい



図153 文字が刻印された奈良時代の一枚作りの平瓦



図154 桶巻き作りの特徴が顕著な奈良時代の平瓦

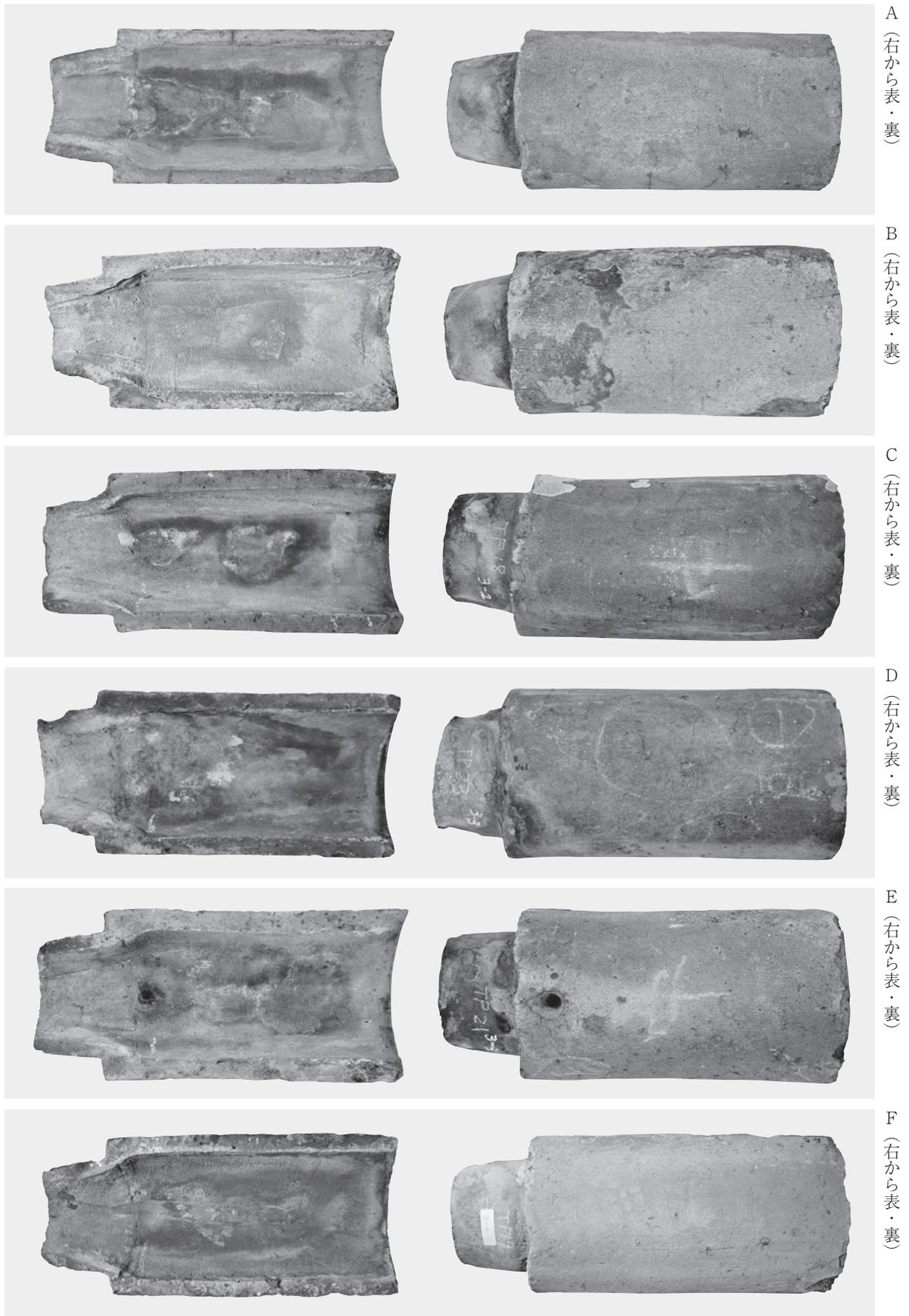


図155 玉縁の取り付けが浅い奈良時代の丸瓦 その1

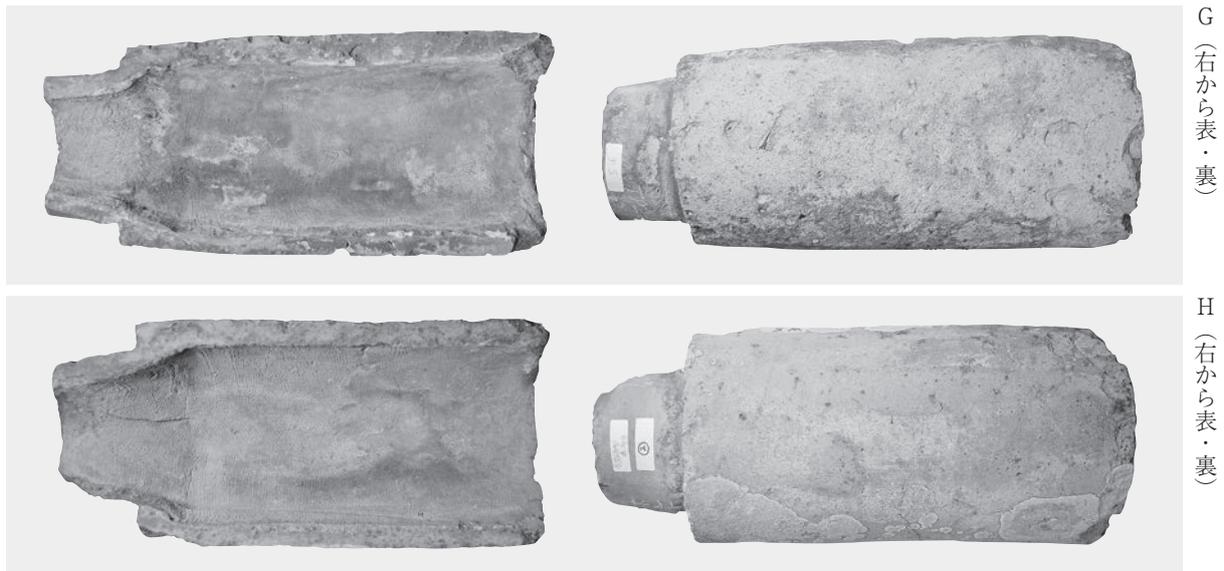


図156 玉縁の取り付けが浅い奈良時代の丸瓦 その2

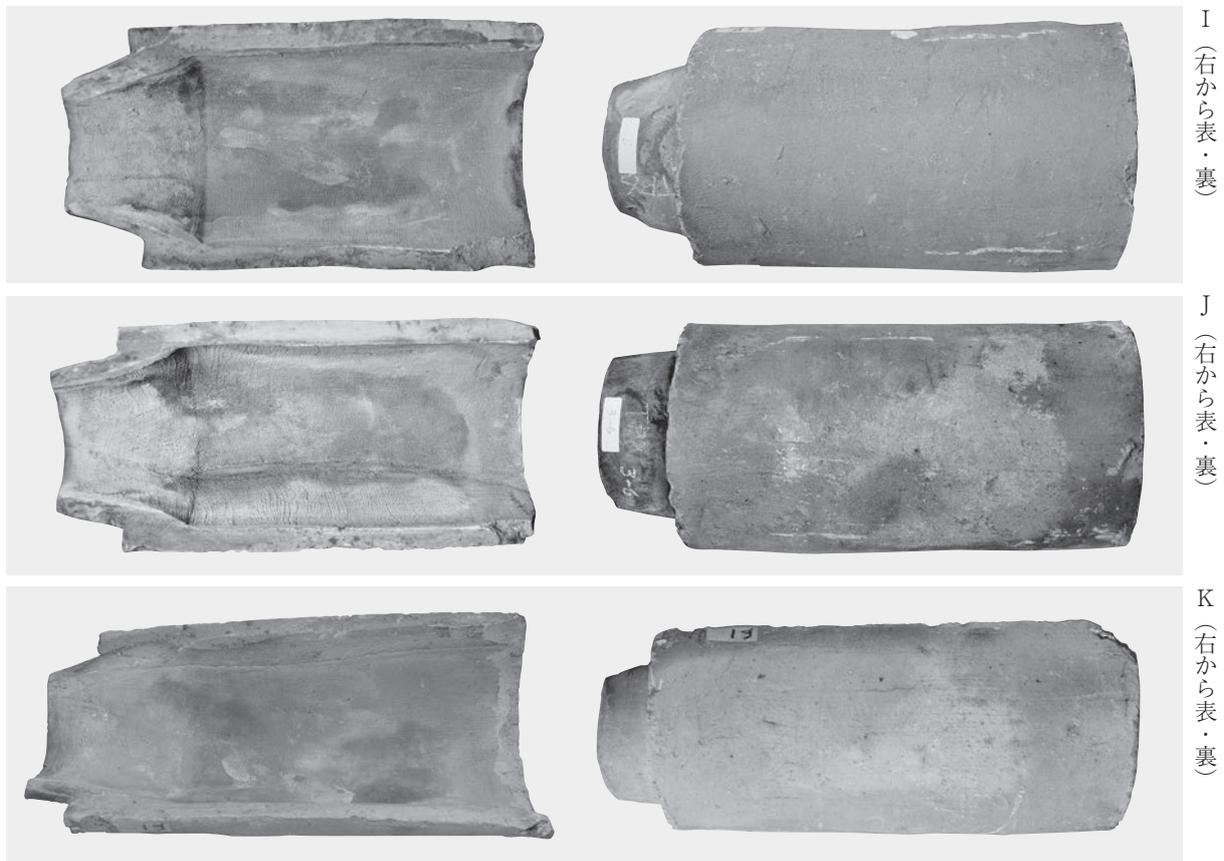


図157 玉縁の取り付けが深い奈良時代の丸瓦



図158 玉縁の取り付けが中間の奈良時代の丸瓦



図159 隅棟から発見された奈良時代の鬘斗瓦
右から表面・裏面・木口面・割断面詳細。

表12 発見された鬘斗瓦の一覧

		■大棟の中9個体以下		すべて破片		…うち1個体のみ形がわかる				
		■隅棟の中10個体		完形5		すべて二の鬼瓦の後方より				
				破片5		すべて稚見棟より				
						…すべて形がわかる				
場所	幅 (mm)	長 (mm)	厚 (mm)	割筋深 (mm)	割筋側	割溝の反対側	糸切跡	短端部	長端部	分割数
1 二の鬼瓦後方	124~127	310	23	3	布目、下	縄目、上	両面	平滑	風蝕？	完全形
	ほぼ平ら			(端不明)	側から45mm茸土痕	側から45~55mm茸土痕 側から25mmは風蝕？				
2 二の鬼瓦後方	120~132	310~315	23	3	布目	縄目、弱	両面	平滑	風蝕？	完全形
	プロペラ状に焼きゆがみ			両端までしっかり	側から50mm茸土痕	不明		茸痕あり		
3 二の鬼瓦後方	127~132	315	25	3	布目	縄目	両面	平滑	平滑	完全形
	ほぼ平ら			両端までしっかり	側から35mm茸土痕	側から24mm風蝕 側から40mm茸土痕		茸痕あり		
4 二の鬼瓦後方	133~135	316~320	21~27	2	縄目	布目なし	両面	平滑	風蝕	完全形
	ほぼ平ら			(端不明)	側から35mm風蝕	胎土粗		茸痕60mm		
5 二の鬼瓦後方	128~135	310~315	25	5	縄目	布目なし	両面	平滑	風蝕	完全形
	ほぼ平ら			両端まで	側から25mm風蝕	胎土粗				
6 稚見棟内	137~140	316	25~27	2	縄目、上	布目なし、下	両面	平滑	上、風蝕 下、平滑	2個
	平ら			両端まで	側から25mm風蝕 側から47mm茸土痕	胎土粗 側から60mm指ナデ		茸痕あり		
7 稚見棟内	120~130	318	25	3	縄目、下	布目なし、上	両面	平滑	平滑	3個
	平ら			両端まで	(不明)	側から60mm茸土痕、 指ナデ、側から25mm風蝕				
8 稚見棟内	120~133	315	24	3	布目、下	縄目、薄	両面	平滑	風蝕	3個
				両端まで	側から35mm茸土痕 側から17mm変色	側から50mm茸土痕 側から25~30mm風蝕				
9 稚見棟内	123~129	320	27	0~3~5	縄目、上	布目なし	布目側	平滑	平滑	3個
				片方は40mm手前で きえてるか？	側から45mm茸土痕 側から25mm変色	側から55mm茸土痕	縄目側は ないか？			
10 稚見棟内	127	314	23	3	縄目	布目なし	両面	平滑	平滑	5個
					側から25mm風蝕	胎土粗 側から40mm指ナデ？ 側から100mm茸土痕？				
11 大棟内	130	315	27	3	縄目	布目なし	布目側	平滑	平滑	4個
	平ら			両端まで	側から45mm茸土痕 側から25mm風蝕？	胎土粗 側から50mm茸土痕	縄目側は なし			

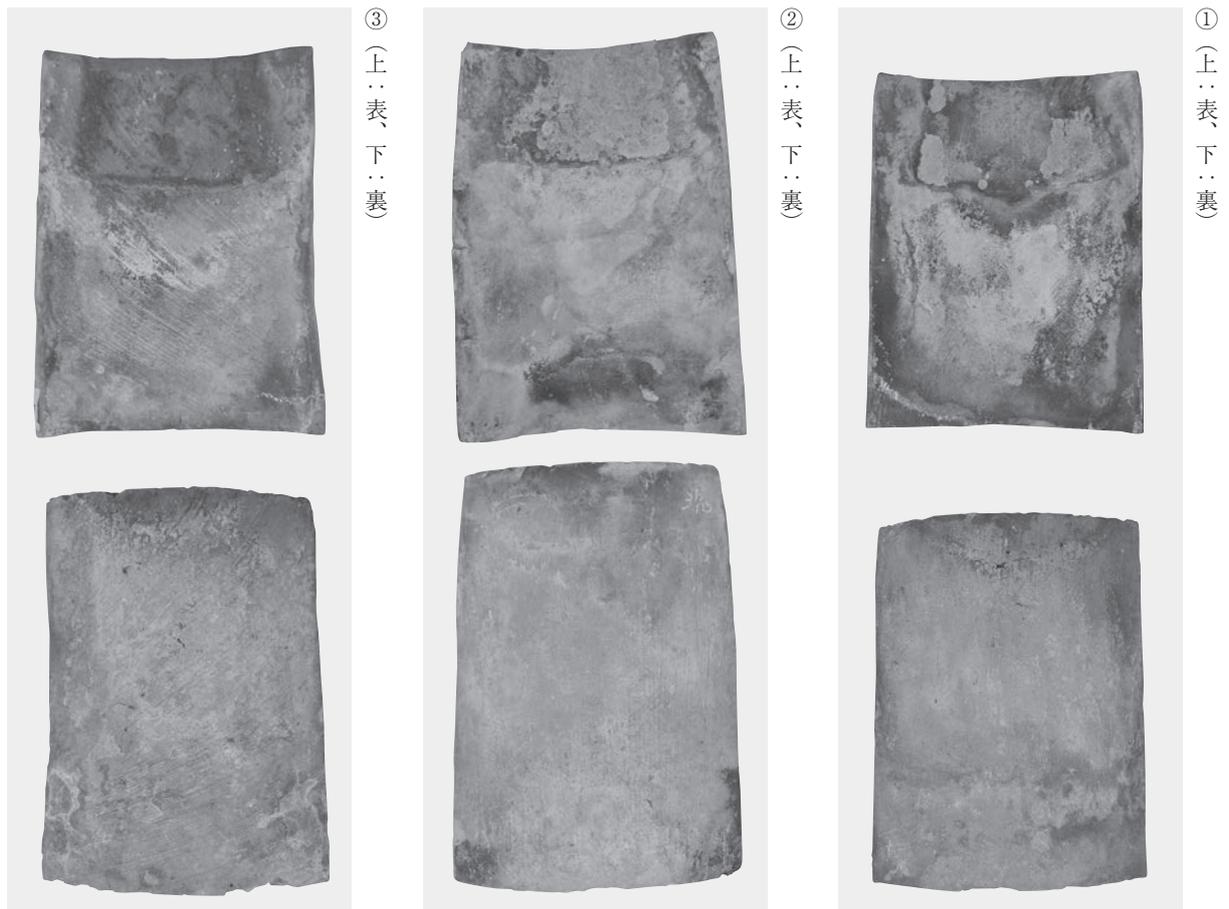


図160 平安時代の平瓦

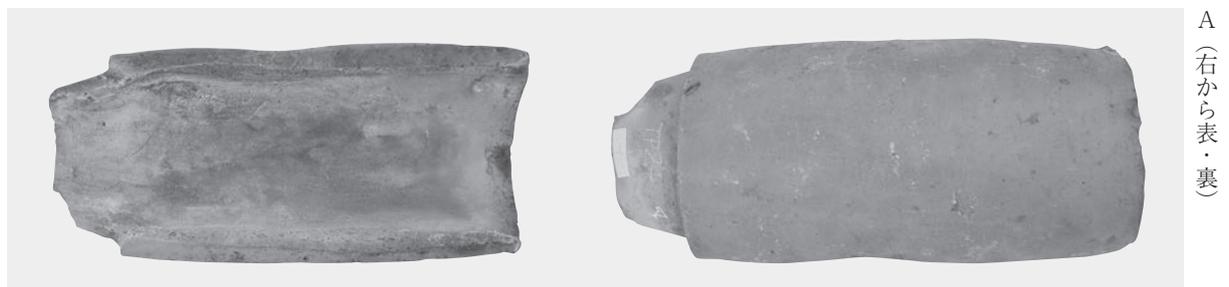


図161 平安時代の丸瓦

の所には葺土の痕跡が見られた。瓦自体に曲がりはなく、全体が平らに作られていた。これらの瓦はすべて半裁されたもので、半分に分るためあらかじめ中央に線が入られていたことが確認できた。この分割線の状況から熨斗瓦であると判断できる。

(二) 平安時代

平安時代の瓦は、平瓦と丸瓦が残っていた。
イ 平瓦

平安時代の平瓦は、一二〇枚(平瓦全体の〇・五三%)残存していた。形状や寸法から約五種類に分類される。表面には布目、裏面には縄目が付けられており、粘土をタタラから切った時の糸切痕が残るものも多く見られた。

ロ 丸瓦

平安時代の丸瓦は、三本(丸瓦全体の〇・四%)であった。表面には縄目、裏面には布目が見られる。厚みが薄く大きな歪みが生じているものが多かった。

(三) 鎌倉時代

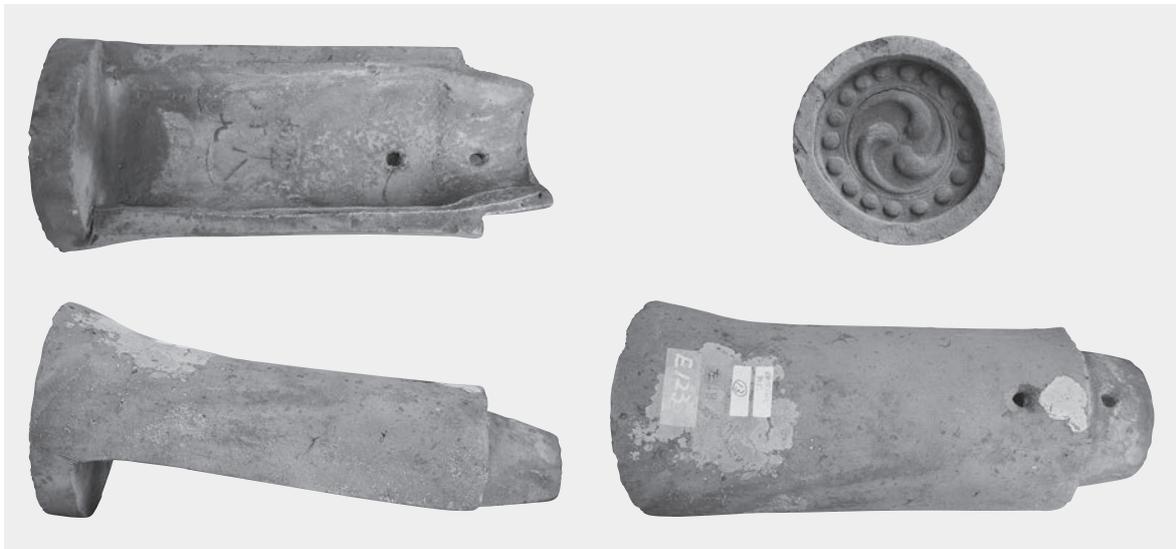
修理前、大正期に次いで多く使われていたのが鎌倉時代の瓦で、当時比較的大きな屋根の修理が行なわれたことを窺わせた。その種類は、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦であったが、平瓦や丸瓦には加工痕の多様性が認められた。



② 軒平瓦B



① 軒平瓦A



③ 軒丸瓦

図162 鎌倉時代 各種軒瓦

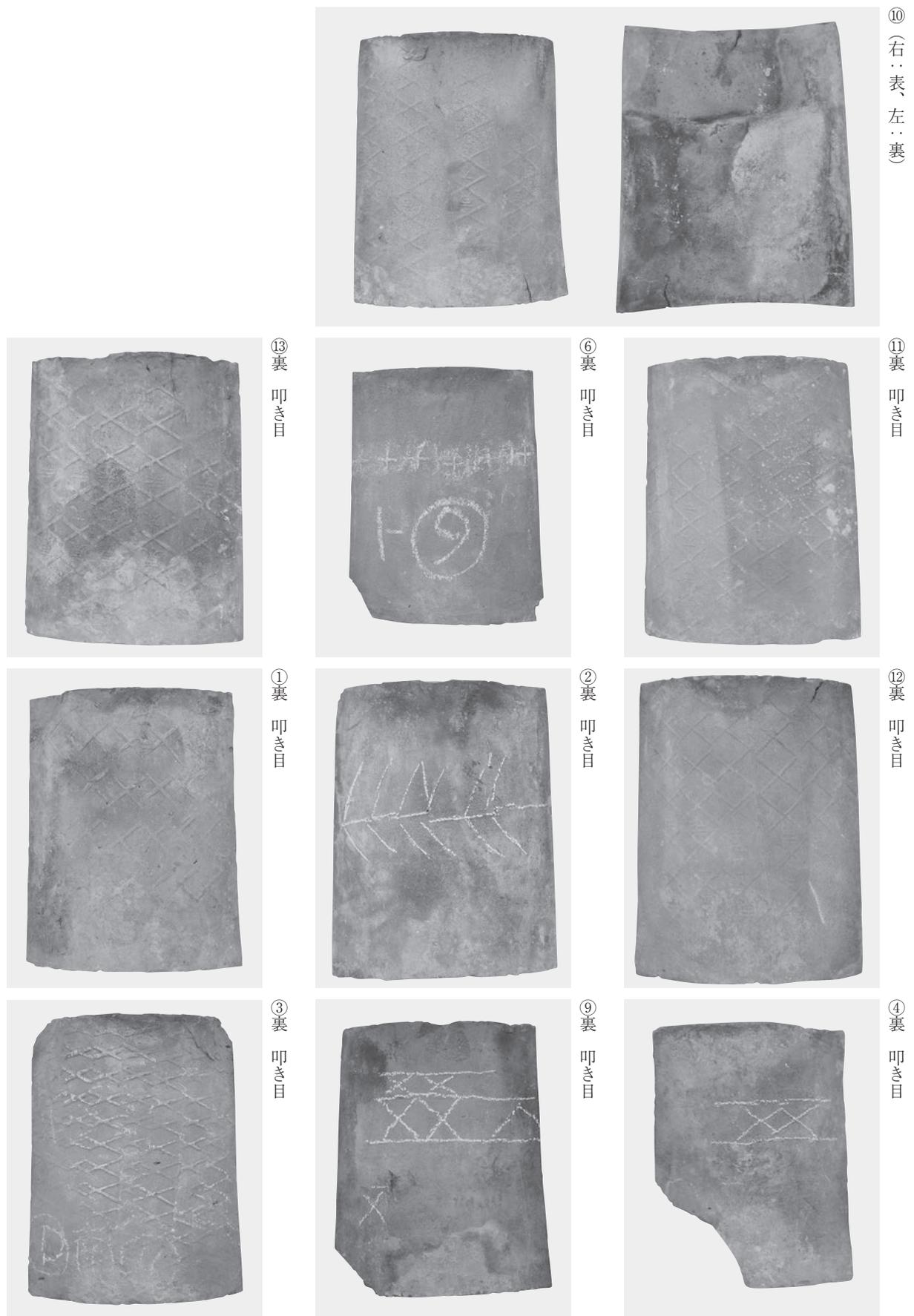


図163 鎌倉時代 各種平瓦

⑩以外は裏の叩き目のみ。番号は第五章第三節第五項 (P.216~217) と合わせた。

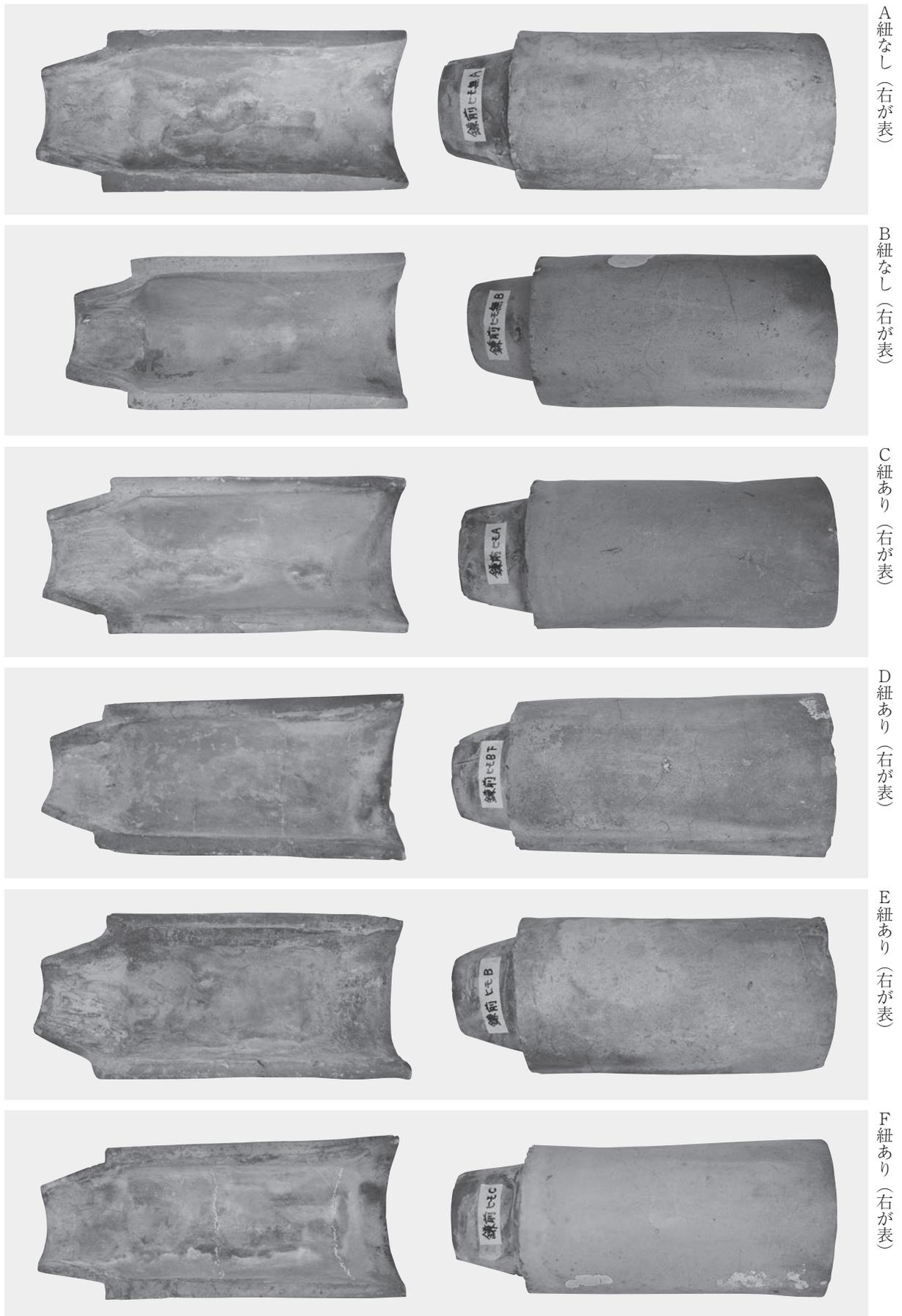


図164 鎌倉時代前期 各種丸瓦

イ 軒平瓦

鎌倉時代の軒平瓦は、三六枚（軒平瓦全体の九・五二％）であった。瓦当文様は二種類見られた。そのほとんどにあたる三五枚は、瓦当中央に「東」「大」「寺」の文字をそれぞれ圏線で囲み、左右に唐草文を配したものを圏線で囲んだもので、裏面には菱目に「東大寺」の文字が押されているものであった。もう一枚は、瓦当文様は風蝕によりはつきりと分らないが、○を並べた周囲を圏線で囲み、その外に珠文を配しているもので、裏面には文字なしの菱目叩きのあるものであった。

ロ 軒丸瓦

鎌倉時代の軒丸瓦は、一本（軒丸瓦全体の〇・二六％）だけであった。瓦当文様は左巻の三つ巴文で、珠文数は一八個だった。

ハ 平瓦

鎌倉時代の平瓦は、五、七四三枚（平瓦全体二五・三一％）で、大正期に次いで多かった。表面には布目が残っていて、裏面には叩き目が残されていた。叩き目は、×字状を連続させ菱目を表現し、さらに「東大寺」の文字を押しているものが多く見られた。菱目の大きさや文字の有無、叩き目の形状の違いから一〇種類に分類できた。

ニ 丸瓦

鎌倉時代の丸瓦は、一、〇四三本（丸瓦全体の一

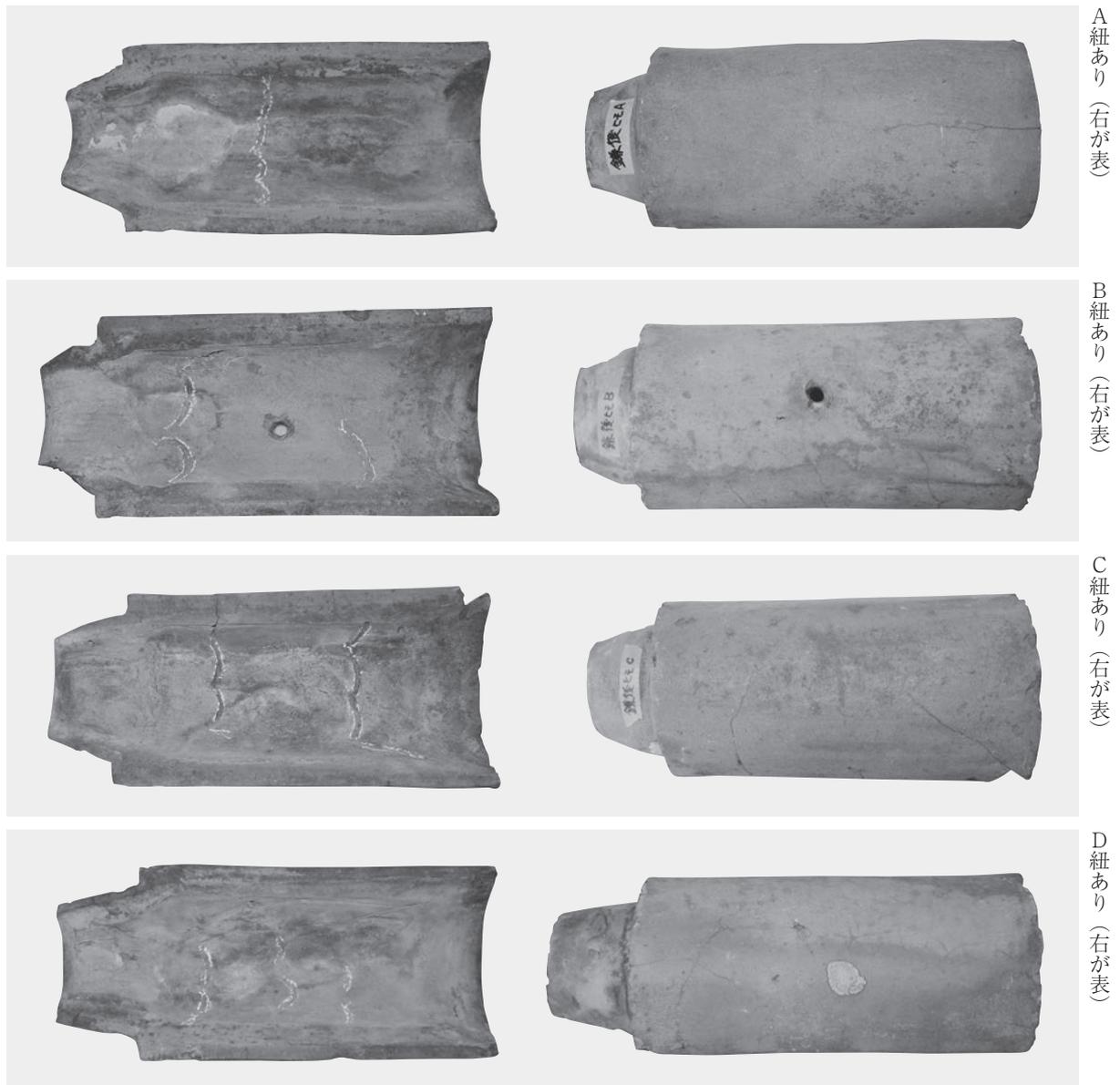


図165 鎌倉時代後期 各種丸瓦

四・五五%)であった。丸瓦では、鎌倉時代から裏面に吊紐痕が見られ始め、吊紐痕の有無や、紐の形状から分類すると、鎌倉時代前期のものと思われる吊紐痕のないものが二種類、紐痕のあるものが四種類見られた。表面には縄叩き痕、裏面には布目が残る。また鎌倉時代後期のものと思われる吊紐痕のあるものが四種類見られた。表面に僅かに縄目が残るものも見られるが、篋ナデを施して縄目が見えなくなるものが多くなる。裏面には布目が見られ、面取は比較的大きくなる。

(四) 室町時代

刻印などに最も多様な瓦が存在する。正倉の修理に関する記録は残っていない時代だが、瓦から見るとある程度の修理が施されていたことがわかる。その種類は、鎌倉時代と同様、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦であった。瓦には多くの刻印が見られるようになるが、この刻印は瓦の生産組織による出来高を把握するために押されたものと思われる。

イ 軒平瓦

室町時代の軒平瓦は、一二枚(軒平瓦全体の三・一七%)であった。瓦当文様は三種類確認された。瓦当中央に「東」「大」「寺」の各文字を圏線で囲み、左右に梵字を配したものが九枚、東大寺の文字の周りに圏線を入れたものが二枚、中央に菊、左右に唐草を配したものが一枚見られた。

ロ 軒丸瓦

室町時代の軒丸瓦は、一七本(軒丸瓦全体の四・四五%)であった。瓦当文様は三種類見られ、右巻の三つ巴文に珠文数二一個のものが一四本、左巻三つ巴文に珠文数二三個のものが二本、瓦当径七寸で中心に梵字を配し、それを取り囲むように東大寺大仏殿の各文字を圏線で囲んだものが一本見られた^{注100}。

ハ 平瓦

室町時代の平瓦は、六七〇枚(平瓦全体の二・九五%)であった。瓦表面に

布目・叩き目はなく、瓦狭端部の凸側に一八〜三〇mm程度の大きな面が取ってあった。瓦の質は固く良質で、よく焼き締まっている。

瓦の木口に刻印が見られ、その数は一八種類確認できた。

ニ 丸瓦

室町時代の丸瓦は、五三四本(丸瓦全体の七・四五%)であった。裏面の吊紐痕の有無や、紐の形状より分類すると、室町時代中期頃のものと思われるものは、吊紐痕のないもの六種類、吊紐痕のあるもので一二種類見られた。表面は、僅かに縄叩きの残るものも見られるが、篋ナデを施している。裏面には布目が見られ、大きく面を取っている。室町時代後期頃のものと思われるものは、吊紐痕のないものが六種類、吊紐痕のあるもので八種類見られた。表面は丁寧な篋ナデを施している。裏面は布目残り、大きな面を取っている。また玉縁側の木口に刻印を押し込んだものが多く見られ、二〇種類の刻印が見られた。この時代の瓦は焼き締まり、表面は篋ナデにより丁寧な仕上げられ、燻もよく残っていて良質のものが多く見られた。

(五) 慶長期

慶長八年には、徳川家康による大規模な修理が行われたことが記録からわかっている^{注101}が、屋根瓦にはそれを裏付ける篋書のある瓦が多く確認できる。慶長期と分類した瓦はすべてこの時の修理のものである。また、修理前の棟積形式は、この慶長期に修理された状態を伝えてきたものと考えられ、鬼瓦や鳥衾瓦の多くに慶長期のものが使われていた。

イ 軒平瓦

慶長期の軒平瓦は、四六枚(軒平瓦全体の二・一七%)であった。瓦当文様は二種類見られた。いずれも瓦当に「東大寺」の文字のみを配したもので、文字の書体と大きさが異なる二種類であった。また平瓦と同じ種類の刻印が押されているのが見られた。